



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.252

2024.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第59回 ● 「加曾利B1式」直後の比較研究

「原論」から「道統」(伝統正統)へは「新しい比較研究」が要請される。

そこで改めて「原論」の要諦から「新しい比較研究」へと「道統」が拓かれる経緯に戻るならば、関東を代表する二方面の加曾利B式遺蹟である大森貝塚(武蔵)、並びに1970年代の中妻貝塚(下総)の未発表資料との遭遇に始まる。全ての破片資料と対峙する「新しい比較研究」では、『図譜』「B1式」の範囲を特定する課題が「道統」として待ち受ける。この間にも茨城県編さん室からは佐藤達夫の中妻貝塚資料見学を打診されるが、その時点では「中妻系列」等「加曾利B1-2式」は試行錯誤の途上であり、面談の機会を逸する。

やがて前回に触れた『図譜』「B1式」の「土器型式」制定アルゴリズムに学び、「新しい比較研究」により下総と武蔵の両遺蹟に共通する深鉢・鉢「範型」の「文様帯シーケンス」が導出され、文献(1980b・1981)として公表される。両遺蹟に共通する「細別」変遷は、型式学的に「B1a式」から「B1e式」への「流れ」となる。文献(1986・2002a)は再検証の機会となり、「文様帯シーケンス」に止まらず、遂には文様帯が器種「範型」を異にして途中で新たに分岐する「文様帯ブランチ」の存在も含め、『図譜』「B1式」の有効性は殆どの未発表破片資料に於いても見事に追認される。

一方、「文様帯シーケンス」や「文様帯ブランチ」等の型式学的効力は『図譜』「B1式」の同定に止まらない。「新しい比較研究」は内部構造の連続性を外部へと拡張し始め、「文様帯シーケンス」から『図譜』「B1式」に続く土器は何か?との連続性の切断に異議が唱えられる。同時に『図譜』「B1式」(「平行線的な磨消縄紋」による「横帯磨消縄紋」)と後述の『図譜』「B2式」(「並行線化された磨消縄紋の名残」)の間を繋ぐ土器は何か?との断続性の接合に涉猟が希求される。

こうした連続性の切断や断続性の接合にも幾つかの学史的資料の評価が関与する。前者は晩年の山内清男による『日本原始美術I』

(1964)の図版解説が不意に仕掛け、しかもその後の磯崎正彦による「十腰内第II群土器」(1968)も『図譜』「B2式」より古式の文様帯として編年的位置付けを「B1式」の範囲とし、「B2式」との切断の接合には至らない(鈴木正博(2024)「宝ヶ峯断想」『利根川』46)。後者は『蛸塚貝塚 総括編』(1962)の麻生優編年が嚆矢であり、大森貝塚(武蔵)方面との連絡性にも注意すべき地方系列(後述の「小仙塚系列」期)を『図譜』「B2式」より古式に位置付けるが、この編年観も同窓の磯崎正彦が関係する。近年では『小山台貝塚』(1976)の市川修編年も「小仙塚系列」を山内清門下の「道統」に従い、「B1式」の後半に位置付ける。後者は報告書に詳しく参照を乞うべく措き、ここでは連続性の切断を解き放つ「新しい比較研究」に注目し、『図譜』「B1式」に続く土器を型式学の実践により穿つ。

第65図は学史的に著名な茨城県陸平貝塚の双口土器(口絵『人類学雑誌』第27巻第8号(1911))である。山内清男は『日本原始美術I』の図版183に掲載し、形態と装飾を「関東加曾利B式(古い部分)の奇形土器。U字管状の土器で、中央に平底が作りつけられ安定した器となっている。体の大部分に磨消縄紋の文様がある。」と解説し、キャプションを「加曾利B1式」と付す。

第65図の「体の大部分に磨消縄紋の文様」は、「横帯文間を斜帯文が連結するという基本的な文様に入り組み文が介入したものである。」と文献(1980b)により補足されるが、山内清男がその「基本的な文様」となる「斜帯磨消縄紋」を「B1式」の範疇とするのは、「奇形土器」への変容に鑑み、『図譜』「B1式」の「平行線的な磨消縄紋」による「横帯磨消縄紋」に着目しての判断であろう。

「新しい比較研究」ではどうであろうか。寧ろ「入り組み文が介入」する作法に着目し、「横帯区切文」としての入り組み文の出現に注目する。この第65図の「特異な入り組み文」は「B1b式」以後の「文様帯シーケンス」延長上

に位置付けられつつも、同時に常南総北以外の関東の広域にも発現する。そこでこの「特異な入り組み文」(釣り針の(如意形)鉤が入り組む形態)を「入組(如意形)鉤文」(連載第56回の「入組交差(如意形)鉤文」を縮約改称)と呼ぶならば、『図譜』「B1式」とは異なる「新しい比較研究」への展望が啓かれる。

「(如意形)鉤文」は「B1c式」の「お玉杓子文」に由来、「B1d(古)式」の「区切り弧線文」への変遷にも深く関与し、「B1d(新)式」で一般化する状況は『図譜』【図版25・26】により明らかである。文献(1980b・1981)は解説図版を重視し「B1式」終末の「B1e式」にも触れ、体部の「区切り対弧文」等と同期し、口縁部にはすれ違う形態の「背反(如意形)鉤文」(連載第56回の「上下交差(如意形)鉤文」を縮約改称)も観られる等、上下配置には個性豊かに多様化する特徴がある。

畢竟、「B1式」の「(如意形)鉤文」は多様な形態と共に展開するが、尚「入組(如意形)鉤文」への変化には至らず、「新しい比較研究」は『日本原始美術I』の位置付けを見直し、その変化を『図譜』「B1式」直後階段と指定する。

こうして「新しい比較研究」が『図譜』「B1式」直後階段へと「文様帯シーケンス」を延長するならば、『図譜』「B1式」や「B2式」とは層位を異にし、年代的地方的「系列」として生成される「文様帯ブランチ」にも目配りが欠かせず、「型式組成」で常に混在する状況からは濃密な地域間交流の展開が指定される。



▲第65図：陸平貝塚の「入組(如意形)鉤文」

*巻頭連載は隔月です。次回は 大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B1式」直後の比較研究(第59回) 鈴木正博 …1
 ■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第11回) 工業善通 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第244回) 水谷侃司 …3
 ■考古学者の書棚 『古墳の見方』 大島彩華 …4

考古の履歴書

私の考古遍歴 (第11回)

工楽 善通

1980年代の中頃までは稲作の起源地が、アジア・モンスーン地帯の中でも、中国南西部の雲南・アッサム地方の山岳地域と考えられ、多くの参考書等で紹介されてきた。しかしこれらの地域では、考古学的な発掘調査で、紀元前数千年に遡る遺跡は見つかっていなかった。この頃から中国では、揚子江下流域での発掘調査が盛んとなり、浙江省河姆渡遺跡をはじめとする新石器時代の遺跡が次々と見つかり、稲作を実証する炭化米や農耕具が出土するようになってきた。そこで東アジアにおける稲栽培の起源地が、揚子江の中・下流であると中国の考古学研究者が言い出し、それらの発掘成果を日本の研究者も賛同して、常識となった。

京大東南アジア研究所の面々は、主たる研究のフィールドがそこにあり、渡部所長はじめ稲作史研究グループは育種学専門の方が主導されていたこともあって、そのバイブルといべきスイスの育種学者ドウ・カンドル著の『栽培植物の起源』に大きく左右されて、雲南・アッサム説が出てきたのであろうと思う。

1992年から発掘調査が始まった中国江蘇省蘇州市の草鞋山遺跡は、藤原宏志宮崎大学教授が代表者となり、南京博物院と江蘇省農業科学院との共同調査でおこなわれた。私は'93-'94に藤原氏から誘われて発掘現場を見学することが出来た。一回目は現地ですぐ寝込めるほどの土坑が点在しているだけだが、この凹みが水田だろうと藤原氏が説明してくれた。この凹み中の黒色土を藤原氏が帰国後に分析すると、やはりP.O.がピークを示したようで、それを念頭に翌年の調査に挑んだそうだ。

ここでの調査の後、藤原氏らの調査団一行は河姆渡遺跡へ移動して、広範囲にわたって土壌のボーリング採集をおこない、遺跡内での水田域をつきとめようとする調査を実施するとのことであった。私は河姆渡へは行ったことはないの、ぜひ同行させてもらうことにした。杭州市からバスに揺られて約4時間、江南の日没風景を見ながらの思い出深い行路となった。車窓から見える瓦葺民家の屋根の棟端には、鴉尾に似て屈曲した裝飾瓦がのっているのを見て、2~3年前に、奈良県唐古遺跡で出土した土器に描かれた楼閣図の屋根を想い出しながら、稲作民の共通性を感じたりしていた。河姆渡遺跡内に建つ博物館では、これまでに各種図録や参考書で見ていた多くの出土品が展示されており、なかでも炭化稲粃と、稲穂と豚画を刻み込んだ土器の鉢、および水牛の骨製鋤先は印象的だ。遺跡は広大で、'70年代に発掘された杭上住居の杭列がそのまま残されていた。私は遺跡全体を見渡そうと、村の人々が利用する小さな渡し船で、対岸の丘の上へ登り周囲の景観を見納めた。遺跡の東端に近い所の原っぱで、藤原さん達がボーリング調査の準備を進めているのが遠望できた。以前の予備調査で、その付近が往時の水田域と推定されるようだ。後日の報告では、現地表面下3m余りの土層で多量のP.O.が検出され、その層は広がっているが、年代は発掘で確かめるしかない。

'94見学の際は、国立民族学博物館の佐々木高明館長も関空から同行され、掘り上げた遺構を見て、初期水田とはこんなものだろうと互いに納得し、帰国前夜には、上海のホテル飯店で全調査員そろって(高明先生支払いで)祝杯をあげた。

1990年代に入ると韓国内のあちこちで稲作関連遺跡が見つかるようになり、また木製の農具の発見も伝えられるようになって来た。1995年には光州市の郊外にある新昌洞遺跡で、以前に畑遺構が見つかった遺跡の丘陵下の低地で、B.C.1C頃の初穀層が30~40cmも堆積しているのが見つかり、多数の木製品のなかに各種鋤等の農具も出土した。発掘面積が限られていた為、水田遺構は見つからないが、周辺の地形観察から、すぐ近くに水田が広がっていたと考えられている。この新昌洞遺跡の発掘調査は、国立光州博物館が実施しており、館長は青銅器研究を専門とする李健茂氏、学芸課長は趙現鐘氏、学芸員の申・張両氏らが担当しており、私は調査開始後その進展に合わせて、度々見学する機会を得た。発掘終了後の2000年には、同博物館とソウルの中央博物館で稲作に関する大きな特別展が催され、シンポジウムも開かれて、私にも発表する機会が与えられた。

韓国では1980年代に、ソウル近郊の美沙利遺跡などで、畝状を呈する畑の遺構が発掘されていたが、'90年代後半には普州市の北方での南江ダム建設の事前調査で、何地点かに及び、青銅器時代の畑遺構が発掘された。そのうち大坪里遺跡では、すぐそばに集落跡も見つかり、根栽類を植えたらしい小穴群も見ついている。遺跡群は広範囲に及び、国立博物館、大学の研究室や文化財調査団等が分担して発掘しており、車で移動しての現場見学は大変だった。そこでは多く研究者と出会い意見交換もした。その成果は当時奈文研埋文センターで行なっていた研修の「水田遺構調査過程」で、スライドで写すなどして大いに役立った。

わが国ではかねてより、沖縄県での稲作の開始がいつ頃かが大きな問題であった。柳田國男が唱える「海上の道」を伝って、中国の江南地方から弥生時代以降に入ってきたのかどうか？ これまでいろんな見解が出されてきた。水田稲作には、雨の多い沖縄でも、結実までの一定期間に豊富な水が必要だ。私と宮崎大の藤原氏は宜野湾市の呉屋義勝氏と連絡をとり、市内の既知の遺跡で湧水が近くにあり、稲作をおこなっている箇所、まずP.O.調査で見当をつけ、遺跡にトレンチを設けて発掘に及んだ。しかし、発掘を進めても、それらしい兆候は認められなかった。この頃、名護市宇茂佐古島遺跡で、径30cmほどで黒色土のつまつた土坑が列をなして並んでいるのが発見され、キャッサバなどのイモ類を栽培していた畑跡だろうと推定される。

2000年10月には、日本考古学協会の大会が鹿児島市で開催され、2つの大きなシンポジウムのうち、その1つが「はたけの考古学」であった。1990年代に各地で発掘された畑遺構の研究成果を発表し合う場で、私はその基調講演を行うことを指名され、大いに嬉んでいた。しかし発表前日の夜、友人達との宴会で、お酒の度が過ぎ、私の畑作論はさんざんだった。

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
//	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
//	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
//	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 244

上野城下町遺跡 ～三重県伊賀市

水谷 侃司

上野城下町遺跡は三重県の西部、伊賀市に所在する近世の城下町遺跡です。上野城下町の起こりは、天正13(1585)年、豊臣秀吉の命により大和国の戦国大名筒井定次が伊賀へ領地替えとなったことに始まります。定次は上野城の建築に着手し、城内東部の高台に三層の天守を築き、北谷口を表門、南を裏門とし、城下町の整備を進めました。

慶長13(1608)年、筒井定次が改易されると、代わって藤堂高虎が伊賀全域と伊勢・大和・山城の一部を領有することとなり、伊勢国安濃津に居城津城を築城しました。慶長16(1611)年には伊賀国統治の拠点、そして大坂城を包囲する城郭の一つとして上野城の大改修ならびに城下町の建設に着手しました。城の周囲は高石垣をめぐらし、南を大手、北谷口を裏門としました。高虎は筒井時代の天守を廃し、あらたに城内西側に五層の天守を築こうとしましたが、完成間近の慶長17(1612)年、竜巻により崩壊しその後再建されることはありませんでした。現在は藤堂時代の天守台の上には、昭和10(1935)年に地元選出の代議士、川崎克が建設した「伊賀文化産業城」がそびえ立っています。

高虎は城下町を台地上に移転させ、大和街道・伊賀街道を城下町に引き込み本城である津城との関係を重視した城下町の建設を行いました。城下町内には東西の主要道路として、本町通り・二之町通り・三之町通りを整備し、この通りに面する店にのみ城下町内での商売を許しました。また、東大手門、西大手門の2つの門から南北方向にそれぞれ、東豎町筋、西豎町筋、その中間に中豎町筋の道路が整備され、これらの町割りには現在の区画にも踏襲されています。



▲調査区全景(北西から)

上野城下町遺跡は日上野市・伊賀市による発掘調査に加えて、三重県埋蔵文化財センターにより6次の調査が行われています。筆者が発掘調査を担当した第6次調査は、平成28(2016)年から平成29(2017)年にかけて行われ、東大手門の前、東豎町筋と呼ばれる通りの調査を実施しました。電線等を地下に埋設する工事に伴う発掘調査であったため、調査面積は140㎡と決して広い面積ではありませんでした。このとき、筆者は入庁1～2年目であり、自分の担当する遺跡から少しでも多くの情報を持ち帰ろうと、日々悩み試行錯誤を繰り返していました。

さて、調査で確認された遺構はわずかに3つで、近世以前の落ち込み、瓦を多く含む土坑、近代の便所でした。それ以外は、近代以降の造成土の中に陶磁器等の近世の遺物が混じる程度でした。上野城下町は江戸時代の城下町絵図が複数枚残されており、今回の調査区はまさに東豎町筋の道路上であると想定されていたことから、町屋等に伴う遺構が見つかる可能性は低いと考えていました。しかし、調査区の北東端にて、瓦を含む土坑と近代の便所が見つかったことは、何も見つからないのではないかと考えていた筆者にとって幸運な出来事でした。道路上に便所を造ることはありえないので、少なくとも便所があった部分は町屋の区画内であると分かりました。

また、出土した遺物からも近世の陶磁器の流通を考える上で重要な成果が得られました。第6次調査では13点の播鉢が出土しており、そのすべてが信楽焼でした。これまでの調査成果からも伊賀地域で出土する播鉢の多くは、信楽焼であることが知られており、この調査でも同様の傾向が見られました。これは伊勢国で出土する播鉢の大多数が瀬戸焼により占められることとは、大きく異なります。このように播鉢には明確な産地の違いが見られる一方、上野城下町遺跡から出土した施釉小物は、京・信楽系に加え瀬戸・美濃も含まれていることから、特定の産地のものを限定して需要しているわけではなく、器種によって産地を選択的に受容していることが分かりました。

このように狭い面積の発掘調査でも、道路の位置を特定し、町の区割りを推定する重要な手がかりが得られたこと、さらに陶磁器の流通について考察する上で必要な情報を収集することができたことは、発掘調査経験の少なかった当時の筆者にとって、常に考えながら発掘調査をすることの重要性を再認識させられることとなりました。

近世の遺跡というのは、発掘調査の対象となることが少ないですが、城跡や城下町遺跡については、比較的多く調査がなされています。城下町遺跡の発掘調査は他の考古遺跡と異なり、城下町絵図や古文書から当時住んでいた人の身分・職業・氏名などの情報が分かることがあり、遺構や遺物等の情報と結びつけることで、当時の生活の様子がまざまざと蘇ってくるのが魅力です。しかしながら、近世城下町遺跡の多くは、現在の市街地と重複しており、戸建・集合住宅の建設や道路工事等により、記録を取った後に破壊されることがほとんどです。記録保存し、次代に継承していくことの責任を我々埋蔵文化財の調査員が背負っていることを忘れずこれからも調査にあたりたいと考えています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山内良祐さんです。

考古者の書棚

「古墳の見方 考古調査ハンドブック10」

土生田純之 編／ニューサイエンス社 (2014)

大島 彩華

はじめに

私が考古学を志したきっかけは、大学1年生の時に受けた考古学概論の授業だった。私は高校生の頃、歴史に対し興味関心があった。大学で歴史学科を専攻し、1年生の秋ごろにはどのゼミナールに入るか迷っていた。そんな時、考古学概論の授業で考古学に強く興味を持ち、日本考古学を専攻することに決めた。ただ、決めたといっても全くの初心者で、図書館でそれらしいタイトルの本を手にとったものの、内容が難しく、ほとんど理解ができなかった。何からどのように学べば良いかわからないまま進級し、考古学ゼミナールへ入った。ゼミナールに入って2年生のときに受けた授業では、本書を要約し、発表を行う課題が出された。本書は、古墳における資料の観察手法や基礎的知識、今までの先行研究などが簡潔にまとめられていた。右も左もわからない私でも、基礎的知識を身に着けるために大変有効だったのが本書であった。今でも資料見学や踏査をする際、参考にしている。

本書はその題名の通り、古墳時代のいわゆる“墓”の要素が主体であり、集落論などは収録されていない。この一冊は古墳時代の入門編というわけではなく、古墳を見るための手法と基礎的知識を学び、研究をするための入り口になる本である。

本書の内容

本書は2014年に出版された本であり、繰り返すが古墳への理解を深め、研究をしたい人間にとって取り組みやすい内容になっている。大別して見学編、遺構編、遺物編、特論の4章で構成される。それぞれの章では、研究史や用語の説明を中心として、その遺構や遺物の何が重要になっているかが簡潔に述べられている。特に用語解説を丁寧に行っている印象が強い。報告書や論文の中で当たり前のように使われている専門用語は、当然だが初めのうちは理解できない。しかしこの基礎的な部分がわからなければ、報告書や論文の前提条件すら理解できないことが大半である。本書ではこのように用語の説明と図・写真があり、研究史が分かりやすくまとめられている点が、これから研究をしたい人やもっと学びたい人の一助となっているといえよう。また、各節が比較的コンパクトにまとまっているのも、考古学や古墳に馴染みのない人が読みやすい要因の一つと考える。

見学編では、遺跡の踏査について地図からの考察の重要性和事例を紹介し、古墳の立地、踏査、分布に関する基本的事項が記述されている。踏査を行う際の準備や心構えも記述されており、初めて資料見学に行く人、踏査を行う人に読んでほしい部分である。

遺構編では、古墳の構築方法、内部主体、古墳の周辺施設、棺について概要がまとめられている。古墳時代の中でどのように変遷したのか、どのような技法が用いられて古墳が築造されたのか、調査事例を交えつつ解説をしている。また、古墳は工事開発により破壊されているものも多く存在し、その事例を挙

げている。研究する立場であれば、保存整備し活用することがより良い状態と考えがちで、開発行為による破壊はもつてのほかという思考が存在する。しかし、この章では破壊されたことによって結果的に得られた成果を研究に役立て、資料として生かすことの重要性にも触れている。

遺物編では、土器、埴輪、鏡、木製品、石製品、装身具、鉄器について書かれている。この章では特に用語の解説を図を用いてわかりやすく紹介している。鉄器や装身具では、資料を観察するときのポイントや心構えが解説されている。鉄器や装身具だけでなく、ほかの資料を観察する際にも転用できよう。博物館や資料調査で資料を観察する際、大変参考になった記憶がある。

特論では、資料の修理・復元のほか、陵墓の資料公開について書かれている。観光資源としての古墳の扱いや、地域の人々にとって古墳とはどのような意味を持つのか、現在でも課題となっている事項について触れている。また、古墳研究のなかでもいまだに全貌が解明されていない陵墓古墳の資料公開の現状と課題についてまとめられている。

本書を通じて、どの筆者も共通認識として存在するのは、資料を見学し、現地を踏査することの重要性である。これは古墳だけでなく考古学の基礎である。また、本書では年代論について特別項目を立てておらず、刊行当時の通説を取り上げているに過ぎない。編者は、これから研究していく中で読者自身の年代観を確立してほしいと述べている。

おわりに

本書を読み、特に印象深く残っているのは、報告書は疑うことのない聖典ではなく、自ら調査をして得た情報によっては新たな視点が見つかることもある、と述べている部分である。今まで教科書に書かれていることを信じて学んできた私には刺激の強い内容であった。研究をするということは、さまざまな視点でモノを観察し、場合によっては今までの定義が崩れることもある奥深い分野であることを知ることができた。

最近では考古学を初めて学ぶ人や学生に向けて、各時代の書籍や考古学といった大枠の概説書が多く出版されている。論文や概説書は最新ののものにあたり研究を進めるべきである。今回紹介した書籍は約10年前に出版されたので、最新の研究史や調査報告はもちろん記載されておらず、別途書籍や論文に目を通す必要がある。しかし、古墳を学び研究をしたい人にとっておすすめできる一冊であり、拙文が手に取るきっかけになってもらえれば幸いである。

アルカ通信 No.252

発行日 2024年9月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp